

6 3 6 1 - 9 3 7
平成18年12月22日

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成18年度病害虫発生予察注意報第9号について
平成18年度病害虫発生予察注意報第9号を発表したので送付します。

平成18年度病害虫発生予察注意報第9号

平成18年12月22日
宮 崎 県

病害虫名	うどんこ病、ミナミキイロアザミウマ	
作物名	ピーマン	
1 発生地域	県下全域	
2 発生時期	—	
3 発生量	うどんこ病	多
	ミナミキイロアザミウマ	多

4 注意報の根拠

- 1) うどんこ病：12月中旬の巡回調査における発生面積率は84.6%（平年41.9%）、発病葉率は13.7%（平年4.4%）と、ともに平年より多である。
- 2) ミナミキイロアザミウマ：12月中旬の巡回調査における発生面積率は77.0%（平年43.3%）、10花当たり虫数は3.6頭（平年1.9頭）と、ともに平年より多である。
- 3) 両病害虫については、既に平成18年度病害虫発生予察注意報第6号（10月24日付け）を発表して、防除を喚起したところであるが、依然として増加傾向にある。
- 4) 向う1ヶ月の長期予報によると、気温は平年より高いと予想されており、うどんこ病やミナミキイロアザミウマの蔓延・増殖に好適な条件が続くと考えられる。

（鹿児島地方気象台 12月15日発表）

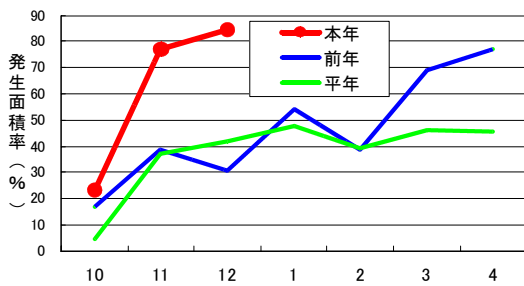


図1 うどんこ病の発生面積率の推移

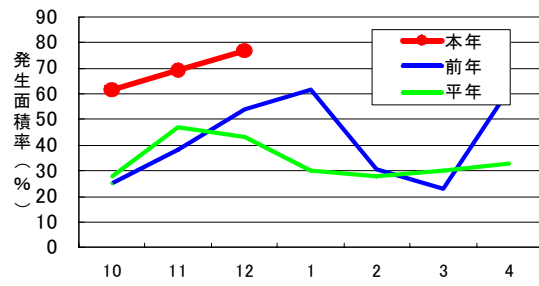


図3 ミナミキイロアザミウマの発生面積率の推移

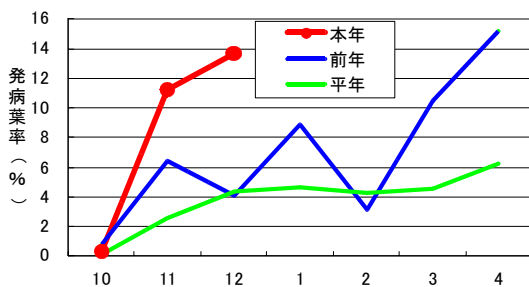


図2 うどんこ病の発病葉率の推移

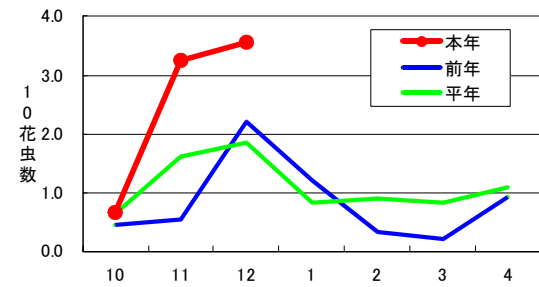


図4 ミナミキイロアザミウマの発生推移

5 防除上の注意

- 1) 両病害虫とも多発生後の防除は困難となるので、早期発見・早期防除に努める。
各病害虫の防除のポイントは次のとおり。

【うどんこ病】

- ① うどんこ病は気温15～28℃のやや乾燥した条件で発病しやすいので、ハウス内をあまり乾燥させ過ぎないように管理する。
- ② 上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、1週間間隔で2回以上の防除を実施する。
- ③ 微生物農薬のダクト散布等では、治療的な防除効果は期待できないので、必ず液剤散布*を実施する。
- ④ ピーマンのうどんこ病菌は、他の作物のうどんこ病菌とは異なり、内部寄生性のため薬剤の効果が現れにくいので、EBI剤などの浸透移行性のある薬剤を防除体系に組み入れる。
- ⑤ 耐性菌の発生を防止するため、同一薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤のローテーション散布に努める。

*液剤散布：水和剤や乳剤など水で希釈して散布する方法の総称（農薬概説より）

【ミナミキイロアザミウマ】

- ① ミナミキイロアザミウマは花や生長点付近に生息し、青色粘着トラップ等に誘引されるので、早期発見の目安とする。
- ② 繁殖力がきわめて旺盛で、高密度時には卵～成虫まで各ステージが混在するため、防除が著しく困難となるので、発見次第早期防除を徹底する。密度増加時には、薬剤散布後に発生（孵化、羽化）する幼虫・成虫に対しての追い打ち防除が必要である。
- ③ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤のローテーション散布に努める。
- ④ 各種薬剤に対する感受性が低く薬剤だけの防除は難しいので、天敵や微生物農薬等による生物的防除などを組み入れるなど総合的な対策をとることが必要である。
- ⑤ 被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出し、マルチの導入（本虫の土中や地表面での蛹化を防止）により密度低下をはかる。

- 2) 効果のある薬剤等防除その他の詳細については、病害虫防除・肥料検査センター、総合農業試験場生物環境部、各農業改良普及センター等関係機関に照会すること。
- 3) 農薬使用基準を遵守し、危被害防止に努める。

《連絡先》

病害虫防除・肥料検査センター 米良
TEL：0985-73-6670 Fax：0985-73-7499
E-mail：byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp